知識探訪　多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会（JAMS）

草の根から世界へ―イスラム団体タブリーグの実像

小河久志（金沢星稜大学人文学部准教授）

イスラム団体タブリーグ。マレーシアにおける新型コロナウイルス感染拡大の報を受けて、初めてこの名前を聞いた読者の方も多いのではないだろうか。タブリーグとはいかなる団体なのか、ここではその実態の一端を紹介したい。

タブリーグは、1925年にイスラム学者のマウラーナー・ムハンマド・イリヤースが北インドのメワートで始めたイスラム団体である。預言者ムハンマドと教友たちが送った信仰生活を理想と見なし、それを体現すべくさまざまな活動を行っている。

活動の中心となるのが、ムスリム（イスラム教徒）によるムスリムを対象とした「宣教」だ。これは、参加者がムスリム同胞に対して、タブリーグが重視する６つの信仰行為を実践することの意義と必要性を説き、かつともにそれを実践するという形をとる。モスク（イスラム礼拝所）を拠点に行われるこの活動では、参加者に細かな規則が課される。タブリーグの特徴としてしばしば指摘される「政治から距離を置く姿勢」もその一つだ。宣教は、参加者の居住地のみならず国内各地や海外でも行われる。2月27日から3月1日にかけてクアラルンプール近郊のモスクで行われた宗教集会。新型コロナウイルスの大規模クラスターが発生したことで注目されたこの宗教集会もタブリーグの宣教の一つである。

タブリーグの宣教には、いくつか条件があるものの、ムスリムであれば誰でも参加することができる。参加者の大半は、ウラマー（イスラム知識人）ではなく、ごく普通のムスリムだ。彼らは、タブリーグの宣教に参加することを宗教的な善行と捉えている。その積み重ねを通して来世の天国行きに近づくことが目指される。しかし、参加の目的はそれだけにとどまらない。イスラムを勉強するため、知らない土地のムスリムと交流するためなど、参加者が置かれた状況に応じてさまざまである。なかには、不良になった子どもを矯正させるために、我が子を宣教に参加させる者までいる。

当然のことながら、全てのムスリムがタブリーグの活動に賛同しているわけではない。宣教に参加することが家族に与える経済的、精神的な負担や、インドで生まれかつ歴史が浅いという来歴などを理由にタブリーグを批判する者は多い。また、コミュニティー全体でタブリーグの宣教団の受け入れを拒むケースもある。

タブリーグが運営する宗教学校で学ぶ子どもたち（筆者撮影）

しかし、タブリーグの宣教に参加するムスリムの数は、そのハードルの低さやシンプルな教えなどもあり世界的に増えている。インド、パキスタン、バングラデシュで毎年行われるタブリーグの年次集会は、ハッジ（メッカ巡礼）に次ぐ世界第二の規模の宗教行事となっている。タブリーグの宣教に熱心に取り組む者の中には、南アジア３カ国に対して憧れを抱く者も多い。タブリーグは、草の根レベルの宣教を通して、支持者をグローバルなレベルにまで広げているのである。そしてその影響は、ムスリムの日常のさまざまな領域に及んでいる。マレーシアを含むイスラム世界の現状を理解する上で、タブリーグは無視できない存在となっているのである。

＜筆者紹介＞
1975年、金沢生まれ。総合研究大学院大学（国立民族学博物館）で博士号を取得。大阪大学助教、常葉大学講師を経て現職。専門は文化人類学、東南アジア研究。タイを中心にイスラム復興や災害対応について研究している。著書に『「正しい」イスラームをめぐるダイナミズム―タイ南部ムスリム村落の宗教民族誌』（大阪大学出版会、2016年）、『自然災害と社会・文化―タイのインド洋津波被災地をフィールドワーク』（風響社、2013年）など。

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます